

## 「漁師たちを弟子にする」

2014年07月08日

マルコによる福音書1章16節～20節。「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。」

シモンは主イエスからペトロ（岩）とあだ名が付けられた弟子である。主イエスは、漁をしていたペトロと弟アンデレに「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と呼びかけた。すると、二人はすぐに網を捨てて従った。また、ゼベダイの息子・ヤコブとヨハネに、同じように呼びかけると、彼らは父と雇い人たちと一緒に舟に残し、従った。このように、4人の漁師たちが弟子として召し出されていった次第が記されている。主イエスのたった二言で、生活を捨てて従っていくようなことが起こるのであるだろうか。ガリラヤ人は血の気が多く、決断的な気質であったと言われるが、彼らの即座の信従に驚く。私たちが洗礼を受ける時は、聖書を読み、真剣に祈って決断する。主イエスの呼びかけは無言を言わせない真実があり、彼らは、それに応答したと伝えている。

ところがルカ福音書5章1節～11節に、ペトロのまねきは違う出来事であったと書いている。夜通し漁をしたが、不漁であった。疲れ切って、岸で網を洗っている時、主イエスの言葉を求める群衆が押し寄せてきた。主イエスは、ペトロの舟を借りて乗り込み、岸から少し漕ぎ出し、群がる群衆に教え始めた。教え終わると、群衆を解散させた後、主イエスはペトロに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をみなさい」と言われた。ペトロは「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と応じた。専門の漁師が夜通しの漁で不漁であった。主イエスの「漁をみなさい」という言葉に応じたのは、舟の上で語られた言葉に感銘を受けたからであろう。言われた通り、漁をすると大漁で網が破れそうになった。仲間に加勢してもらい、網をあげると、二そうの舟は魚でいっぱいになり、沈みそうになった。この時、ペトロは主イエスの足もとにひれ伏し「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。このペトロの態度と言葉に主イエスとの決定的な出会いが見て取れる。ペトロは「漁をみなさい」という言葉を疑ったかも知れないが、何も罪を犯してはいない。しかし、私は罪深い者です。汚れた私から離れてくださいとひれ伏している。

罪は「聖なるもの」に直面した時、認識される。ペトロは主イエスに「聖なる神」を見、必然的に、自分は罪深い者であることを知らされた。福音書には、普通の人には主イエスが誰であるか分からなかったが、汚れた霊に取りつかれた人は大声で「いと高き神の子イエス」と叫び、ひれ伏したと書いている。「聖」が「罪」を畏れをもって認識させるのである。ペトロは自分の罪と対極にある「聖なる神」を主イエスに見て「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」という呼びかけを受け入れ、全てを捨てて従う者になった。信仰は罪認識の深さを通して、神への信従を真実なものにしていく。